

# 日本語を母語とする幼児の外国語習得

—ケース・スタディー—

(中間報告)

島岡 丘・島岡 良衣

## はじめに

国際化が進む中、日本においても乳幼児に対して外国語教育を行う施設などが増えており、少子化にもかかわらず、英語のみで保育や託児を行う施設(プリスクール)などは、ここ数年の間にむしろ急激に増加している<sup>1)</sup>。「外国語教育は、小さいうちから行うのが効果的である」ということは広く認知されていることではあるが、幼少期から英会話学校やプリスクールなどに通っただけで、外国語をネイティブのように話せるようになることを期待することは難しい。実際、英語だけで保育を行うプリスクールにおけるヒアリング<sup>2)</sup>によれば、3歳以下の幼児でも、日本語だけを話す家庭環境にある子どもたちの中には、英語を聞いても英語の音が十分に聞き取れず、発音もネイティブのようにはならないケースが多く散見される。

それでは、日本語を母語とする幼児に対してどのような働きかけをすれば、外国語を自然に聞き取ることができ、ネイティブ並みの発音をすることができるようになるのであろうか？ 母語の習得段階にある幼児は、大人の外国語学習者と異なり、

1. 母語を完全に習得していない。
2. 言語の規則性などについて十分に理解していない。
3. 身の回りの環境についての理解が不十分である。

などの特徴がある。従って、日本語を母語とする幼児が外国語を効果的に習得するためには、大人の学習者とは異なる配慮が必要になると思われる。

筆者は、最近初孫が誕生し、幼児の言語能力の発達を間近で観察する機会を得、幼児の外国語習得の特性について幾つかの興味深い発見をした。そこで本稿では、筆者の問題意識としてこれらの発見を整理して紹介することにした。今回の発見により普遍性を持たせるため、今後は幼稚園入園前の3歳未満の幼児グループに観察対象を広げ、実際の検証を行って行きたい。

なお、本稿をまとめるにあたり、素材の提供および今後

のフィールド・ワークなどは、孫の母親である娘が中心に行うことから、本稿についても、娘との共同研究とする。

## ケース・スタディー

筆者には、2007年1月に孫が誕生した。孫の父親は、中国語(北京語)と広東語を母語とし、流暢な日本語と英語を話すマルチ・リンガルであり、母親は、日本語を母語とし、流暢な英語を話す。しかし、家庭の中の会話はすべて日本語であり、生後11ヶ月までは、日中の保育は日本語のみを話す祖母が受け持った。外国語のインプットは、CDを聞かせる他、朝夕の限られた時間で、父親、母親がそれぞれ中国語、英語を話しかけたり、読み聞かせをしたりした。生後12ヶ月からは、母親が中心となって保育を行うことで、英語の比重を高め、生後14ヶ月からは、徐々に英語環境を増やし、生後15ヶ月からは、中国語の時間を意識的に取るようになった。

アウトプットは、生後15ヶ月位までは日本語がほとんどで、他の言語は非常に限られていた。しかしシャドウイングが始まってからは、言語に関係なく身の回りの物をさす単語などを中心に良く覚えるようになった。はじめは言い返すだけのことも多かったが、徐々に意味を理解するようになり、日本語、英語、中国語などの区別も付くようになった。下記の記録は、言葉がはっきりと発現した生後10ヶ月目から直近までの記録である。

## インプット時の整理とアウトプットとの関連性

孫と同じプリスクールに通う2歳児の中には、「わたし lunch eat したの」と言ったり、「昨日、carに乗ってparkに行ったの」という子どもたちがいる。前述の通りこの年齢の幼児は、母語が一つの言語体系としてでき上がっているわけではないので、多言語環境にあると、アウトプットの際に異なる言語間で混乱を生じるようだ。孫の場合は、まだ長いセンテンスを話すわけではないので、一つのセンテン

言語習得の観察記録

月齢	意識をして行った働きかけ	言葉の発現など
満10ヶ月	毎日、絵本の読み聞かせの他、CDで日本語、英語の音楽をかけてやる。家庭では、ほとんどの時間を日本語で過ごし、週に1回1時間、英語のネイティブと遊ぶ時間を作った。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マンマと言った。</li> <li>・喃語を多く発するようになる。</li> <li>・指差しがさかんになる。</li> <li>・自分の名前を呼ばれると、手をあげて返事をするようになった。</li> <li>・好きな曲にあわせて体を揺らしたり、リズムをとるようになった。</li> </ul>
満11ヶ月	絵本などに加えて、毎日5分程度、絵カードを見せながら身近なものを中心として、日本語、英語の単語を教える。週に1回1時間、英語のネイティブと遊ぶ時間を作った。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パパをパパ、ママをママとはっきり区別をして言うようになる。</li> <li>・意味のある言葉のアウトプットは少ないが、大人が言うことの口真似ができるようになる。</li> <li>・英語でBye, Capなどと言った。</li> <li>・イナイナイばあ、と自分で言って遊ぶようになった。</li> </ul>
満12ヶ月	絵本や絵カードなどの他に、なるべく心がけて、話しかけてやる。ほとんどは日本語で過ごすが、英語では、週に1回1時間、英語のネイティブと遊ぶ他、歌を歌ったりした。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ベビーサインで「ミルク頂戴」をするようになった。</li> <li>・食事のあと、空になった皿を見て、ナイナイと言った。</li> <li>・「ありがとう」、「こんにちは」、というと腰を屈め、頭を下げるようになった。</li> </ul>
満13ヶ月	手遊び歌を取り入れたりして、歌の種類を増やした。絵本をじっと聞かなくなったので、飛び出す絵本や写真入りのものを一緒に見る。絵カードでは、カルタとりのようにして、単語数を増やしてやる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手遊びで、おつむてんをするようになった。</li> <li>・自分で読んで欲しい本を持ってくるようになった。</li> <li>・いくつ? と聞くと1歳と指を立てて言うようになった。</li> <li>・家はどこ? などと聞くと「ココ」と言うようになった。</li> <li>・犬を指して「ワンワン」と言うようになった。</li> </ul>
満14ヶ月	絵本、絵カードの他に、一日あったことなどをいろいろと話かけるようにした。英語では、週に2回、2時間程度、プリスクールの授業に親子で参加をして、絵本の読み聞かせを聞いたり、歌ったりする。日本語にない英語の音入れをしてやる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ますますシャドウイングが盛んになる。</li> <li>・身近な食べ物や動物の名前を言うようになった。例)にんじん、バナナ、イチゴ、キュウイ、ぞう、コアラなど。かぼちゃを「かっちゃ」、パンダを「パンパ」などと言う。</li> <li>・家族が寝ているところを指したり、他の人が寝ている写真や絵を見て「ねんね」と言うようになった。</li> <li>・カーカー、にゃーん、パオーンなど、動物の鳴き声を盛んにまねするようになった。</li> <li>・英語の発音練習をした後で、自分でも「p, p, p」などと練習するようになった。</li> </ul>
満15ヶ月	日本語、英語に加えて、毎朝5分程度、挨拶、数の数え方、家族の呼び方など、中国語で繰り返し聞かせるようにした。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「アイアイ」「おもちゃのチャチャチャ(日本語、英語)」など10曲ぐらいを歌えるようになった。</li> <li>・おいしい! 可愛い! などと感想を言うようになった。</li> <li>・「くっく履いた」などと言うようになった。</li> <li>・英語の単語が増え、Eye, Head, Fruit, Appleなど、体の一部や、身近なものの名称がわかるようになった。</li> </ul>
満16ヶ月	旅行などをしたものの、特別な働きかけはしなかった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ばば」から「おばあちゃん」、「くっく」から「くつ」など、いくつかの幼児語から正しい単語へと切り替わった。</li> <li>・2語文を盛んに言うようになった。</li> <li>・How are you? Where are you? など、歌の歌詞を会話に使うようになった。</li> </ul>
満17ヶ月	英語のみで保育を行うプリスクールのサマースクールに3週間ほど参加した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こっち行く、あっちに行く、など、言葉での意思表示を盛んにするようになった。</li> <li>・中国語で我要、謝謝、などと言った。</li> <li>・パパの、ママの、などと言い、所有を理解するようになった。</li> <li>・ママおいで、タオル欲しい、わたしイヤ、などと言うようになった。</li> </ul>
満18ヶ月	特に積極的な働きかけはしなかった。日本語のみで保育をする保育園に3週間ほど通った。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の単語を約300語、英語を約50語、中国語を約15語覚えた。</li> <li>・日本語、中国語で1から10まで数えるようになった。</li> <li>・英語の歌を盛んに歌うようになった。</li> </ul>
満19ヶ月	プリスクールが始まり、週5回、午前中のクラスに通い始める。家庭では引き続き、絵本の読み聞かせや、歌を歌ったりする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アザラシ見たの、など過去のことを説明するようになった。</li> <li>・英語と日本語の違いが分かるようになり、「英語(で)なんだ」と聞いてくるようになった。</li> <li>・アルファベットを見たり、英語を聞くと「ABCだ!」と言うようになった。</li> </ul>
満20ヶ月	プリスクールで、週2回フランス語の授業が始まる。家庭では、「なんだ」遊びをよくしてやる。絵本の読み聞かせをするほか、絵カードも見せてやる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の歌を40曲くらい、英語の歌を10曲くらい歌えるようになった。</li> <li>・プリスクールで、シャドウイングを盛んにするようになった。</li> <li>・フランス語で、Pardon(すみません)、Bonjour(こんにちは)、Au Revoir(さようなら)などと言うようになる。フランス語の歌を2曲覚えた。</li> <li>・「英語なんだ」、「中国語なんだ」、と盛んに聞いてくるようになった。</li> </ul>

スに異なる言語を混同して使うことはあまりしないが、プリスクールに通うようになってから、母語の認識における混乱が見られる。例えば、嫌なことがあると、「嫌々」ではなく「No, no」と言い、こんにちはよりも「Hi」と言う事が多くなった。それぞれ、「No, no」、「Hi」の方が感情がこもりやすいようであり、そういう意味では、孫の意識の中では、「No」、「Hi」がそれぞれ母語と位置付けられているのかもしれない。

アウトプット時に異なる言語間での混乱を少なくするため、インプット時の整理は大変重要な役割を果たしているようである。孫は、生後17ヶ月目から始めた「英語(で)なんだ」「中国語(で)なんだ」と聞くようになったので、大人がインプットする際、意識的に言語別の整理をするようにした。まず、新しい単語を教える時に、はじめに日本語で教え、それに続けて、「英語では～」、「中国語では～」と説明するようにした。また、父親が中国語、母親が英語の担当と明確にするようにした。孫には、「パパは中国語」、「ママは英語」と教えた。しばらくすると、父親がいる時に中国語の知っている単語を多く言うようになり、母親がいる時に英語を多く発音するようになった。

異なる言語の回路がそれぞれできてくると、新しい音を聞く際にそれが何語であるのかという予測がしやすくなるようである。中国語の歌は、比較的最近から聞き始めたが、はじめて聞くCDでも中国語のCDがかかると「中国語だ!」と言うようになった。

### 他言語習得時の母国語の影響

外国語の習得における臨界期については様々な議論があるものの、発音に関しては、幼児期ほどネイティブの発音を習得しやすいということは、多くの研究者が認めている。しかし幼児期においても、母語の習得が他言語より圧倒的に先行していると、母語の発音の影響を強く受け、短期的に他言語の聞き分けおよび発音が難しくなる傾向があるようだ。発達記録でも明らかなように、孫は、日本語の習得が他の言語に比べて、かなり先行しているため、英語や中国語の発音でもその影響によって困難を伴うことがあった。

孫が生後17ヶ月の時、赤色のカードを見せて「Red」と言うと、しばらく考えて、「あか」と言って走って行ってしまった。恐らく、「ウレエド」と口を丸めての発音に違和感を感じ、言いやすく、既に覚えていた「あか」を選択したのであろう。アルファベットを発音すると、やはり「L」と「R」の区別がつかず、「Row-Row Row Your Boat」を歌ってみる

と、やはり始めのうちは「ローローロー」となってしまった。中国語も、教え始めたばかりの頃は、ネイティブの発音とはほど遠く、四声を聞き分けたり、ピンインの“zhe”と“qi”の発音を区別することはできなかった。しかし、何度も口の形を見せながら発音したり、一緒に歌を歌ったりしているうちに正確な発音になってきた。

歌などでも、聞き慣れている発音かどうかで、吸収度合いが異なるようだ。一つ一つの単語を覚えるのではなく、通しでメロディごと覚えてしまうのであるが、聞き慣れない発音も、十分に音入れをしてやると、すんなりと覚え、スムーズに発音するようになる。例えば、前述の「Row-Row Row Your Boat」などでは、CDだけで聞いている間は、「R」の音が上手く発音できなかったが、一緒に歌ったりしているうちに正確に発音できるようになった。

また、動機づけとして、英語や中国語の発音を正しく発音できた時にはものすごく褒めてやり、間違った発音をした時には、聞き返したり、修正してやったりした。そのうち、自信を持って発音できる幾つかの単語は、何度も繰り返し言うようになり、褒めてもらいたいと催促をするようになった。

### まとめ

孫はまだ母語の習得過程にあり、他言語をどれだけ習得できるかは実験段階にあるが、これまでの観察を通じて発見したことの中で、幼児期における効果的な外国語習得の要素として考えられることを、下記に整理してみた。

1. シャドウイングは幼児の言語習得上とても有効であり、身近な人間が話しかけ、それを繰り返すことで言語習得が飛躍的に進む。
2. いくつかの他言語を同時に習得する場合、全く規則性がなく聞いていると、言語間で混乱を生じやすいが、インプット時に言語別の整理がなされれば、自然に聞きわかるようになる。
3. 日本語の習得が他言語よりも圧倒的に先行している場合、他言語の聞き取りや発音には、日本語の影響が大きく、自動的に母語における発音に変換したり、聞き慣れない音の発音を避けたりする傾向がある。しかし、母語と異なる発音については、意識的な音入れをしてやると、何もしない場合よりもはるかに習得が進みやすい。
4. 新しいことを学ぶという好奇心や「通じた!」「褒められた!」という成功体験は、幼児の言語習得にとって非常に有用である。

今後も孫の観察を続けるとともに、観察を通じて発

見たことが他の幼児にも該当するかどうかについては、今後さらに検証を行いたい。本稿における研究が、日本における幼児への効果的な外国語教育に少しでも寄与できれば、幸甚である。

- i 矢野経済研究所 「語学ビジネス市場に関する調査」2008年8月28日。
- ii 東京都港区内のアメリカ系インターナショナル・プリスクール。

#### 参考文献

- Ellis, Rod(1997), *Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- JACET SLA 研究会(2005), 「第二言語習得研究」開拓社。
- Lightbrown, Patsy M., Spada, Nina(2006), *How languages Are Learned*. Oxford University Press.
- 大石 晴美(2007), 「脳科学からの第二言語習得論」昭和堂。
- 島岡 丘(1999), 「カナ表記で通じる英語の発音」日本能率協会マネジメントセンター。
- Van Pattern, Bill, Williams, Jessica(2007), *Theories in Second Language Acquisition*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 山本 雅代(1999), 「バイリンガル」大修館書店。